２０２５年度

大学院文学研究科博士課程前期２年の課程入学試験

（　夏期・一般選抜　）問題

外国語試験　　日本語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号	

２０２５年度

大学院文学研究科博士課程前期２年の課程入学試験

（夏期・一般選抜） 問題

外国語試験（　　日本語　　）

成績

一、次の文章を読み、後の問に答えよ。

大富豪は、プライベートジェット機で世界各地に出かけることができるらしいが、そんな世界を［ア］にかける人であっても、髪の毛を伸ばして地中から養分を吸い取ることが不可能なように、地球の生命維持基盤から離れて生きていくことはできない。宇宙船も(A)小さな地球を船内に詰め込むことでしか、人間を乗せることができない。銀河系のスケールから(1)鑑みれば、人間の動きなど、植物の動きとほとんど変わらない。葉の角度を変えることと、朝出勤して夜帰宅することと、大きな違いはない。お前たちは動きが鈍いと植物や自分以外の人間を軽蔑するやつらだって、しょせんチーターよりも鈍い。動いているようにみえて、そういった人間たちも意外と動けていない。どれほど、リニアモーターカーやロケットのように、もっとスピードのある乗り物を開発したとしても、人類は、植物を、あるいは植物を食べた動物を食べなければ、生きていけない。二酸化炭素と光で糖を合成できる人間が生まれないかぎり、植物の生存条件はそのまま人間の生存条件である。

根を張り、葉を開く。

めまぐるしく世の中が動く、とよくいわれる。だが、どれほどめまぐるしく動いていようが、体内の調整ほどめまぐるしくはない。呼吸、体内の(2)クダによる物質の運搬、濾過（ろ）、排出。温度調節、圧力調節、水分調節。外敵の退治。人間と植物に共通するこれらの機能こそ、めまぐるしいという形容詞にふさわしいのであって、プライベートジェット機に乗って世界を飛びわたる大富豪のめまぐるしさは、植物のめまぐるしさには、もっといえば、大富豪の体内の細胞のめまぐるしさにさえも、はるかに及ばない。

ならば、植物の動きから私たちはもっと学ぶべきことがあるだろう。人類の祖先が葉と根を捨てたときの痕跡を自分のうちに探る。そんな思考実験によって、自己を相対化してみることも、こんな時代だからこそ(3)無益ではないだろう。

まず、根について。

人間の根について考えることで、ようやく人間は、歴史の中で、とりわけ現代史の中で、一部の権力者たちの取引や戦争によって強制的に移動を迫られ、命の危険に晒（さら）されながら故郷から離れ、別の土地に根を生やそうとしてきた人たちの心の内を知るためのとば口に立てるのではないだろうか。

「根」を退化させることで、経済活動の活性化を(4)図ってきた近代社会は、住み慣れるという感覚、根っこを抜かれる感覚、場所を移動することの恐怖、新しく根を張ることの勇気を忘れようとしてきた。そうして、根の記憶の痕跡を抹消し、動きつづけることこそが、経済的にも、社会的にも、思想的にも、トレンドとなってきた。そのトレンドの背景にはもちろん、ナチスが、ユダヤ人や、かつて「ジプシー」という蔑称を用いられてきたシンティ・ロマの人びとを「根なし草」だとレッテルを貼り、強制収容所に隔離して、人体実験をし、文字通り根絶やしにした苦い記憶が存在する。国境をまたぐ流浪の民を差別する(5)コウジツとして、「根」というとっくの

①　複雑　　②　安易　　③　簡略

問四　空欄イにあてはまる最も適切な語を次の中から選び、○を付けよ。

①　肩　　②　腰　　③　股　　④　足

問三　空欄アにあてはまる最も適切な語を次の中から選び、○を付けよ。

①　周到　　②　周到

問二　一重傍線部「せっかく」とあるが、「せっかく」を用いて短文を作文せよ。

(3)

問一　傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字にはその読みを記せ。

(4)

(5)　　(1)　　(2)

（藤原辰史『植物考』〈生きのびるパッチワーク〉による。30～33頁）

ちがしに別れを告げた器官が思い起こされ、差別感情の増幅に利用されたのである。すくなくともこうした現代史の事実を無視して植物性を議論することは、あまりにアンフェアだ。ある悲劇は、人間となったとき短期間でも滞在したことを前提に考えなければ、現在の青々に立った自線から過去の事象として消化されてしまう。せっかく伸ばしていた根を、鉢を変えつづけられて引っこ抜かれることが、いや、外部からの力によって自分の根を自分で引き抜くべきだが、それほど残酷で切ない行為であるのか、その感覚がなければ、ある悲劇の非劇性には迫れない。

（藤原辰史『植物考』〈生きのびるパッチワーク〉による。30～33頁）

台番号記験会

問五　傍線部(A)「小さな地球を船内に詰め込む」とあるが、どういうことか。わかりやすく説明せよ。

問六　傍線部(B)「あの悲劇の悲劇性には迫れない」とあるが、筆者はどのようなことを主張しているか。「あの悲劇」の具体的な内容をふまえて、説明せよ。

二　問一～二に答えよ。

問一　次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の（　）内に直接記入せよ。

現代ほど、人の眠り（①　）粗末にあつかわれた時代（②　）ない。先進諸国と自負する国々は睡眠不足にあえぐ人々（③　）あふれ、人口の三分の一は眠りたい（④　）眠れないという苦しみにあえいでいる。タングステン電球を発明したエジソンは、これで太陽（⑤　）しがみついた原始的な生活は終わり、人は自由に好きなときにはたらき、好きなときに眠ることができるようになると豪語した。つまり二四時間都市を実現し、夜と昼の束縛から解放されれば、人々は自由に思いきり楽しい生活ができるはずであった。

たしかに人工衛星から撮った夜の地球は、繁栄する都市が不夜城のようにうっすらと輝いて見える。繁栄（⑥　）謳歌する巨大都市群は、まさしく二四時間都市として、すみずみまで電灯の光（⑦　）いきわたっている。このように人工の太陽（⑧　）もちこむことで、人々は夜（⑨　）昼（⑩　）変え、自然界とは独立に人の要望にあわせた生活環境をつくりあげてきた。エジソンの発明はこの不夜城の魅力をいっそう高めたので、その社会的影響を「エジソン効果」とよぶ。

（堀忠雄『快適睡眠のすすめ』〈岩波新書〉による。一頁）

問二　次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

「偶然」とは「必然」の（①）である。こまっ必然でない偶然がいくつもの偶然があるが、したがって「偶然とは何か」という問いは、「必然とは何か」という問いと（②）と（③）の関係があり、一方の答えを導くことになる。

とニンジンよく考えてみると、「必然とは何か」という問いに対する（④）の根本問題にたかっているが、すべての宗教においても、それは根源的なもの、この宇宙に秩序を与えているものは何かという問いを含み、哲学の根本問題である。近代科学の宇宙観はそれに対して機械的因果論という一つの立場をとっている。そのような立場自体は科学によって検証されるものではない。こまっ科学は「原則的に検証可能な科学的法則によって説明できる」と主張するが、このことも自体は（⑥）的に証明できるものとしたらこの宇宙に（⑧）ものは本来存在しない」と考えるの力学的法則に従い、したがって（⑦）的である。この宇宙にエートンカ知識が不十分ながらもこのように思われるだけであり、したがってそうして、人間にとって「偶然」と見えるものは、対象についての知識の結果であるにすぎない、ということは主張した。

（竹内啓『偶然とは何か―その積極的意味』〈岩波書店〉による。ⅲ～ⅳ頁）

「（⑨　　）」とは単に「（⑩　　）」の結果であるにすぎない、ということ。

受験記号番号

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

食べることには、その人特有の意思や意識が潜んでいます。何を食べるか、どのように食べるか、なぜ食べるかには、必ずといっていいほどその人の〝マイルール〟が存在します。宗教の禁忌によって食べないこともあれば、ベジタリアン食や話題の食を好んで食べるということや、小さい頃からの好き嫌いで食べる食べないということもあります。食べるという行為には、個人や集団、時代や文化などの考え方が入っています。ちょっと大げさにいえば、「思想的な食の選択」を私たちは日々行っています。

米国の文化人類学者マーヴィン・ハリス氏は、「食べものというのは、胃袋に入る前に、集合精神の飢えを満たさなければならない」、つまり「食べるものを選択できるのであれば、個々の食べものの特性ではなく、人々の思考パターンによって決まる」と話しています。

ふだん私たちがものを食べるときは、食に対する精神、観念、価値体系などといったことをいちいち気にかけません。食が習慣化されているため、立ち止まって考える必要性がないからです。食の思想といったものを自覚するのは、親しんできた食習慣や食行動に変化が生じたり、異質な食文化や食環境に出会ったときです。たとえば、旅行、転居、結婚、入院などをした際には、食についてふだんよりも強く何かを思うことがあるでしょう。

日本人が思う「寿司」と海外の人が思う「sushi」は、必ずしも一致しません。それがはっきりあらわれたのが、２００６年、海外での間違った日本食の蔓延（まんえん）を危惧した日本の農林水産省が、正しい日本食店を認証する「海外日本食レストラン認証制度」の創設を発表したところ、海外メディアから一斉にバッシングを受けるという〝事件〟でした。「スシポリスが日本からやってくる」と揶揄（やゆ）され、多くの非難を集めたことなどで、最終的に農水省は実施を見送りました。スシに対する〝保護主義〟と〝自由主義〟というある種の「食のイデオロギー対立」が起こったといえます。

日本人からみるとちょっと怪しげなものであっても、現地の人にすればれっきとしたスシであることは間違いありません。同じように日本やアメリカのピザも、イタリア人は憤りを覚えるかもしれないでしょうし、インド人からすれば日本のカレーも奇妙に感じることでしょう。おいしい料理は、国境を越え、その土地で変容し、多様化する宿命をもっています。

また食べものは、政治的なイデオロギーなどにわかりやすく使われることもあります。日本国内では、「日本米」がイデオロギーに利用されていた時代がありました。１９３０年代の満州事変の頃、「日本米が、日本の国体を守る国民心性を育み、天皇制を支えるひとつの土台になる」と賛美されました。また、第二次世界大戦時のドイツでは、ヒトラーが自らのベジタリアン思想を用いて、意志力の強さは菜食主義にあると述べ、戦争に勝つための「正しい食」のあり方を主張していました。それは「ベジタリアン・イデオロギー」と呼べるもので

した。

人々の考えを誘導し、その行動を左右するために使われてきた歴史が示すように、食は集団の心をつかんだり、動かしたりする支配的な力をもっています。

私たちは、ふだん、個人的な特徴とまわりにある社会集団との関わりの中で、自分が何者なのかを定義して、社会的なアイデンティティを作り上げています。「何を食べるか」「どのように食べるか」といったことは、すべてアイデンティティの形成作業につながっています。

中世ヨーロッパの貴族の食事などでは、食べる行為が、自己イメージや他人に対してのイメージを作り出し、社会的地位、身分、人気について暗示することで、ステータスシンボルの役目も果たしてきました。また現代でも、オーガニックの野菜を食べる人やファストフードの牛丼を食べる人に、固定観念的な見方を抱く人もいるでしょう。食べるという個人の行為は、社会的な意味をもち、人々のアイデンティティの構築に重要な役割を果たしています。

さらに、食によるアイデンティティは、個人だけではなく、国家や地域、人種や階層、ジェンダーなどのヒエラルキー形成にも反映され、強化されています。前述したスシは、日本人にとって「国民食」の代表であり、だからこそ「ナショナル・アイデンティティ」を感じやすい対象です。そのため、自分たちが思い描くスシと異なるスシを目にすると、感情を揺さぶられる人が多いのでしょう。他の国、韓国であればキムチ、米国であれば感謝祭の七面鳥、英国であればフィッシュ・アンド・チップス、オーストラリアであればベジマイト（パンなどに塗る塩辛いジャムのようなもの）などが国民食にあたるといわれ、それぞれの食べものが、その国のアイデンティティ形成に深く関与しています。さらに、地域、人種・民族、家庭などには、それぞれの「ソウルフード」があり、それらが精神的な支えになっている場合もあります。

日本の国民食のひとつといえるものに、梅干しがあります。日本に来た外国人が、初めて梅干しを食べる動画がSNSなどに多数投稿されており、その多くは、見た目やにおいからは予想できない塩っぱさに、顔をしかめたり、悶絶したりしています。この反応は、その人が日本の食文化に馴染んでいないことを示しています。つまり、梅干しのような日本っぽいものを普通に食べることは、そうした人が日本人である可能性が高いことを示す一方、驚くような反応を示す人はそうではないことを暗示しています。

スシや梅干しの例が示すのは、食が、集団や個人のアイデンティティにとって大事な要素であり、とりわけ、その人がどの国家や地域、人種・民族に属しているかを明らかにするものだということです。人々の間で維持されてきた食文化は、個々の帰属意識を育む際に重要な役割を果たしています。たとえば、お正月に食べるおせち料理や雑煮などは、家族のアイデンティティ、自己のアイデンティティの形成に関与してきたことでしょう。

（石川伸一『「食べること」の進化史―培養肉・昆虫食・3Dフードプリンタ』〈光文社〉による。168～174頁）

受験記号番号	

この回答欄は縦書きに使っても横書きに使っても構いません。